



脚本 蜂須賀



karasuno10

[http://unohirotest.mydns
.jp/hiroshi/cgi/top.pl](http://unohirotest.mydns.jp/hiroshi/cgi/top.pl)

男と女

蜂須賀

烏野
博史

人

物はちすかりき
蜂須賀力(30) フリーター
大神姫野おおかみひめの
(25) 無職

① 道路

雨の中、牽引車けんいんしゃがフロントがへこんだ車、ビートルを引っ張って走っている。

② 走る牽引車けんいんしゃの中

運転席はちすかりきにつなぎを着た蜂須賀力はちすかりき（30）、助手席おおかみひめのに大神姫野（25）。姫野は雨に濡れていて、肩にタオルをかけている。姫野、濡れた髪の毛をタオルで拭く。

姫野「……蜂須賀さ。あの娘の事好きでしょ。ほら、前に一緒に居た彼女」

蜂須賀、道の先を見ている。

蜂須賀「あれは友達の彼女だ」

姫野「関係ないわね。好きなんでしょ？」

蜂須賀、ハンドルを切る。

姫野「私のファンだったわね。とりもってあげようか？」

蜂須賀「ひきさくの間違いだろ」

姫野「ああ、バレてた」

蜂須賀「くだらない事はやめろよ。こっちは

真剣なんだ」

姫野、眉をひそめる。

姫野「あの子のうなじにつられて、ついポロツと告白しちゃった」

蜂須賀「そうですよ。僕はどうせ、うなじフエチですよ……」

姫野「落ち込んでるの？」

蜂須賀「良い年齢としして、夢みたいな事を言ってる人とは付き合えないです。だと」

姫野は眉をひそめる。

姫野「……彼女の住所教えなよ。不幸にしてあげる」

蜂須賀「教えないよ！ お前、本当にやりそうで怖いよ！」

窓によりかかる姫野。

姫野を見て、溜息をつく蜂須賀。

③ マルトモ自動車・工場こうば

薄暗がり。明かりとりのための、一部半透明の天井のトタンを雨が叩く。フ

ロントがへこんだビートルの前に立つ
蜂須賀と姫野。姫野の側、そば灯油ストー
ブの前の椅子に姫野の上着がある。

姫野、腕を組み蜂須賀を見る。

姫野「蜂須賀——」

蜂須賀、ビートルを見ている。

蜂須賀「大丈夫。破損前より綺麗にしてやる」

姫野「そうじゃないの蜂須賀。今月は金を払

ってくれる彼氏がいないの」

蜂須賀「……俺に無料タダで働け、と？」

姫野「良い考えね」

姫野と蜂須賀は見詰め合う。近寄る姫

野を手の平で静止する蜂須賀。

蜂須賀「……それ以上、こっちによるな」

姫野、怪訝な顔をする。

蜂須賀「いいか、動くな。ちよつと待て、落

ち着け俺。カームダウン」

蜂須賀、深呼吸をする。

姫野「ああ……興奮してんだ」

姫野、自分の濡れた服を見て、蜂須賀

に近寄る。

蜂須賀「だから、ちょっと待て、俺にも心の準備が……」

蜂須賀、胸に手をあて、呼吸を整える。

蜂須賀「……良いぞ。さあ来い！」

蜂須賀、両手を広げる。

姫野「行かないわよ。馬鹿じゃない？」

蜂須賀「死ね！」

姫野、蜂須賀の頬をはたく。

姫野「シャワー室。借りるね」

姫野、シャワー室に歩いていく。

④ 同・事務所

窓から工場が見える。灯油ストーブの前、バスタオルを頭にかけて、つなぎを着た裸足の姫野がコーヒーを持って床に座っている。蜂須賀は事務作業用の机に座っている。蜂須賀の側の棚には95年限定品のアナスイの香水の箱。姫野、ストーブの火を見つめる。

姫野「――だから、別れてやったの。その後で事故。ついてない」

蜂須賀、見積書を姫野に渡す。

蜂須賀「それは、運のせいなのか？」

姫野「最期に、95年限定モノのあのアナスイだけ買わせれば良かった」

姫野、うなだれ、見積書を床に落とす。

姫野「欲しかったなあ、アナスイ」

蜂須賀「ああ、それな、仕事先で偶然――」

蜂須賀、香水の箱を棚から取り出す。

姫野「あれ、くれたら。彼女になってあげても良いのに」

蜂須賀、立ち止まる。

姫野「何よ？」

蜂須賀、机の本立てに箱を隠す。

蜂須賀「いや、何でもない」

姫野「好きだったのになあ」

溜息をつく姫野のうなじ。

蜂須賀、両手で両ほおをつねる。

姫野、顔を上げ、蜂須賀を見る。

姫野「何してるの？」

蜂須賀「いや、別に、俺、トイレ」

蜂須賀、出て行く。

⑤ 同・トイレ前

シンクで顔を洗う蜂須賀。

手をつねる蜂須賀、鏡を見る。

蜂須賀「あれは作戦。あいつは魔女。きっと

無料働^{タダ}きさせる気だ。誰が思う壺になるか」

蜂須賀は両頬を叩き、踵を返す。

⑥ 同・事務所

姫野、工場のビートルを見ている。

姫野、蜂須賀の席を見る。

本立てにはさまれた香水の箱。

蜂須賀、事務所に入り姫野を見る。

姫野、香水の箱を手取る。

蜂須賀「いや、ちがー」

姫野「なに、これ！ アナスイじゃない！

私のために手にいれてくれたの!？」

蜂須賀「違う。違う。違う。それは――」

姫野「嬉しい！」

蜂須賀「嫌、違う。違うんだ――」

姫野「これどこで手に入れたのよ！」

蜂須賀「それは仕事先の――」

姫野「でかした蜂須賀！」

姫野、蜂須賀に抱きつく。

蜂須賀「……」

蜂須賀、姫野を引き剥がす。

姫野「何よ！」

蜂須賀「だから落ち着け、それはな……」

姫野「それは？」

蜂須賀「それは……」

目に少し涙をためている姫野。

蜂須賀「……キミへのプレゼントだよ」

姫野「やった」

地面に両手をつく蜂須賀。

⑦同・工場

灯油ストーブの前に姫野の服一式が干

されている。蜂須賀はビートルのボンネットを開き、修理をしている。ストーブの側で、椅子に座っている姫野。

姫野、香水を手につきかけて嗅ぐ。

姫野「で、音楽活動のほうは進展があったの？」

蜂須賀、ビートルの修理をしている。

蜂須賀「ライブしたり、持ち込んだり、最近
大手レーベルのプロデューサーと話す事がある
ってさ——」

姫野「ふーん。努力は身を結ばないものね」

蜂須賀「聞けよ」

姫野、ビートルのトランクからボロい

ギターを取り出して奏でる。

姫野、歌う。

ストーブの前で干されている姫野の服。

雨音が止み、天井の透明なトタンから

光が差し込む。

蜂須賀、ボンネットを閉め、折りたた

み椅子を持ってきて座り聞く。

演奏が終わり。眉を顰める。

姫野「これ、あげる」

姫野、ギターを蜂須賀に差し出し、微笑む。

蜂須賀「……良いの？ もらうよ」

姫野「限定モノ、アナスイのお返し」

ためらいながら、姫野からギターを受け取る蜂須賀。

蜂須賀「……ありがとう。うお、やった」

姫野、天井の透明なトタンをみる。

日が差し込んでいる天井のトタン。

姫野「雨、やんだね」

蜂須賀「ああ」

姫野「修理できてないじゃない」

ビートルのフロント、歪んだフレーム。

蜂須賀「あとは外装だけだ」

蜂須賀、ギターを置き、ビートルの中に入りエンジンをかける。

姫野、不服そうにビートルに乗り込む。

⑧ ビートルの中

蜂須賀が運転席、姫野が助手席に乗っている。

蜂須賀「何で、お前まで乗ってくるんだよ？」

姫野「試運転、するんでしょ。乗せてよ」

蜂須賀「いやまだ、まあ……仕方ねえな」

姫野「彼女になってあげようか」

蜂須賀「はあ？　なんでお前と」

姫野「あら残念——」

蜂須賀、溜息をつきうつむくが、体の

前で親指を立てている。

姫野「あんたはきつと馬鹿ね」

蜂須賀「……お前、友達少ないだろ」

姫野「数少ない友達に、そう言われて光荣ね」

蜂須賀「親父好き」

姫野「ロリコン」

蜂須賀「付き合おう」

姫野「冗談やめてよ」

姫野、鼻で笑う。

蜂須賀「何でだよ!？」

蜂須賀はうなだれる。

著者HP：[鳥野の箱庭](#)

